書評論文

『砂漠の宝石：トパーズの日系人強制収容』

日系アメリカ人史研究のフロンティア

村　川　庸　子

Jewel of the Desert: Japanese American Internment at Topaz, by Sandra C. Taylor (Berkeley: University of California Press, 1993), xix ＋343 pp., photos, biblio. index, ＄35.00 cloth. ISBN 0-520-08004-1.

はじめに

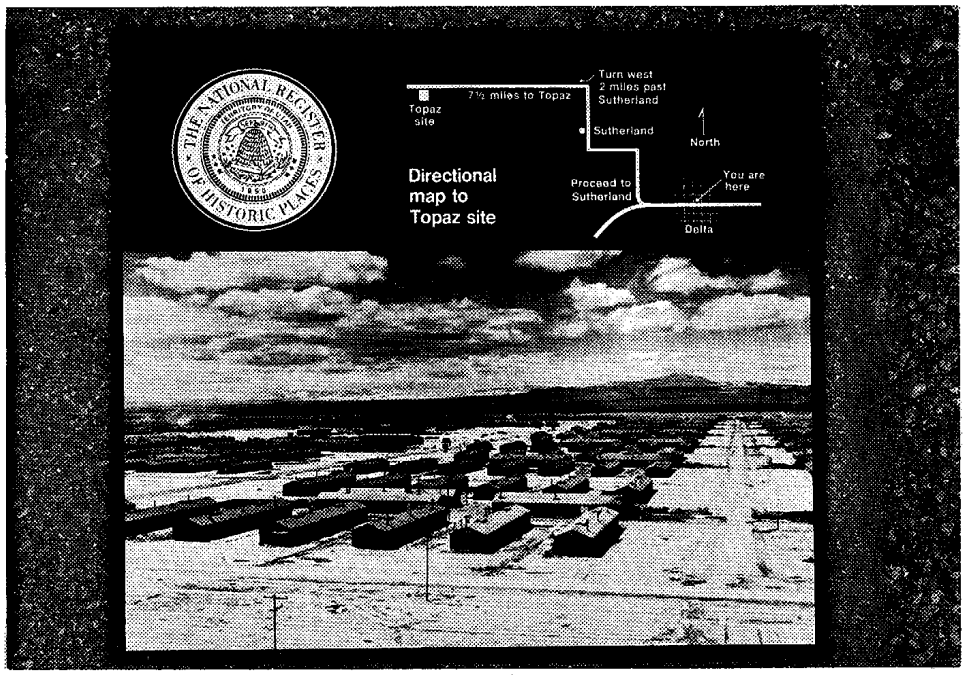
1942年２月19日にルーズベルト大統領によって署名された行政命令第9066号は，陸軍西部管区司令部のデウイット中将に「特定軍事地域から如何なる人間であれ退去を命ずる権限」を与えた。続いて３月２日デゥィット中将により，陸軍公報第１号が発布されカリフォルニア州，オレゴン州，ワシントン州の大半とアリゾナの一部をしめる軍事地域が指定された。これにより，約11万人の日本人及び日系アメリカ人（以下，特に断らない限り日系人と記す）の西海岸からの立退きが実施されることになった。この内，約３分の２にあたる７万人は「アメリカ生まれの市民」である二世で，ただ一件のスパイ活動やサボタージュの立件もないまま，敵である日本人の血を引くという理由だけで，「軍事的必要性」という口実でもって—即ち西海岸の防衛上「潜在的危険性」をもつ存在であるという理由で—集団立退きを求められたのである。その後，これらの人々は，全米十カ所の収容所に隔離されることになった。皮肉にも「砂漠の宝石」という美

しい名前で呼ばれたセントラル・ユタのトパーズ収容所もその一つで，鉄条網で囲まれた収容所の中で，長いものは1945年10月に閉鎖されるまでの３年余にわたり，不安な生活を送ることとなった。

1994年夏，筆者はデルタという小さな町の近くにある，トパーズ収容所の跡地を訪ねた。[1] 前日に訪れたアイダホ州のミニドカの周辺では，緑豊かな農地に囲まれ，満々と水をたたえた農業用水が堰から大音響を轟かせながら流れ下っている様子にほっとさせられていた。これとは対照的に，トパーズは，盆の縁のように周囲を囲む遠くなだらかな丘陵にも緑の色はなく，乾燥しきって殺伐とした印象をうけた。これまで長い間日系アメリカ人の歴史研究に携わっていながら，自分が，どの収容所に関する記述を読んでも，20年前に唯一見ていたマンザナ収容所（カリフォルニア）のイメージに重ねていた，ということに初めて気づいた。それぞれの場所に，これほど環境的な差異があるという当然なことに，これまで思い至らなかったのである。自然環境ばかりではない。それぞれの収容所には個人的，社会的な背景を異にする人々が集められ，それぞれの地に，それぞれ異なる社会を築き上げていたはずである。その事実に踏み込むことなく過してきたうかつさが悔やまれた。

夕刻が近いというのにじりじりと焼けつくような日差し，半ば枯れた草原を土埃を巻き上げながらわたる風，最初に車外に出た同乗者が，日本ではおよそ見ることのないような大きさの羽蟻の大群に襲われるというハプニングもあって，50年前にこの地で暮らした人々の生活の厳しさがしのばれた。

写真A　デルタの町中にある収容所跡地の案内のための碑
（写真はすべて1994年７月31日　筆者撮影）



写真B　上の碑の一部を拡大。かつてのトパーズ収容所全景

写真C　収容所跡地に建てられた記念碑

近年，この第二次大戦中の強制立退き・収容政策に対し，アメリカ政府による公式の謝罪と賠償（「損害・不正などを被った者を救済する，不幸・損害などを矯正する，除く」という意味のリドレス（redress）という言葉が用いられた）が行われた。先に述べた跡地の碑もこれを機に建てられたものである。これらの収容所跡地を訪ねる旅は，日系アメリカ人史の「過去」と「現在」の両方を見せてくれる旅となった。

まず，「過去」に関していうならば，この土地にも，50年という時を超えて，予想以上に多くのものが残されていた。収容所のバラックの土台や，当時，所内で出来映えを競ったという池，同じく当時植えたものと思われるチャイニーズ・エルムの木などが，はっきりそれと分かる形で残存していた。雨の少ない乾燥した気候と，開発の手が隅々まで及ばない広大な国土があってこその保存状況である。更にデルタの町中には何軒か，改造され，現在も人々が居住している収容所のバラックも見られた。[2)]

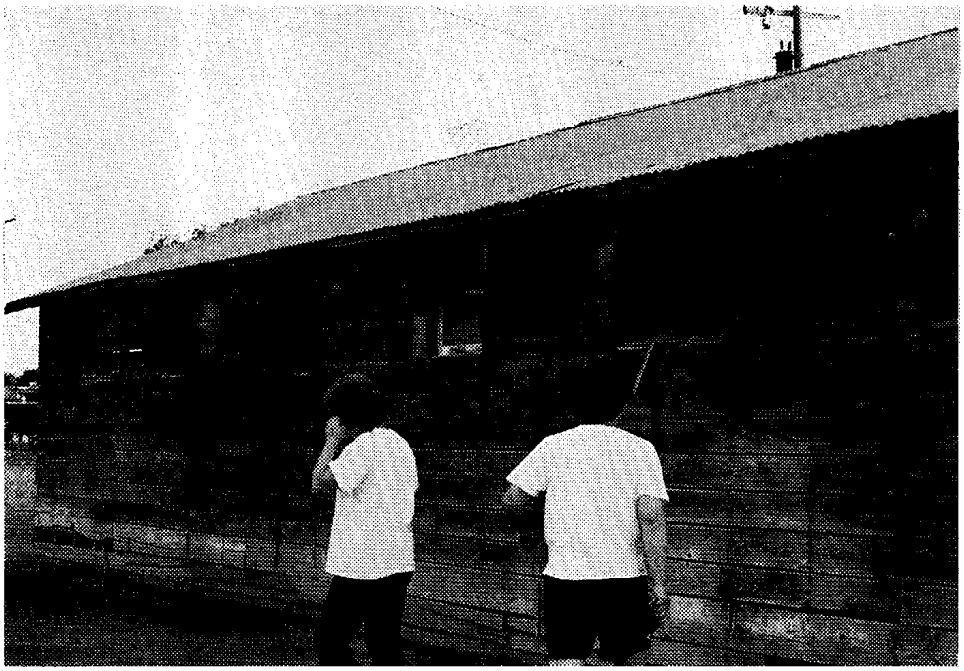
この度の賠償が実現するまでに紆余曲折があったことは言うまでもないが，これに対し一般のアメリカ人が本音のところでどのように受けとめて

写真D　バラックの土台の石組

いるのか，という「現在」の状況は，ずっと気になっていた。これについては，二つの相異なる兆候が見られた。まずは，跡地に立つ碑に撃ち込まれた散弾銃の痕がそれである。「広々とした何も目立つもののない荒野では，立っているものはすべて標的になるのであって，これに特別な――人種偏見などの――意味を見いだしてはいけない」，という日系人の方の示唆があった。確かにアメリカでは，あちこちで穴だらけの交通標識を見かける。それと同じものだとみなすべきかも知れない，と思う一方で，ツールレーキ収容所（カリフォルニア州）近くの墓地で見た，日系人の墓石に撃ち込まれていた弾痕のイメージが重なって，やはり複雑な思いが残った。今一つが，デルタに住む高校教師，ジェーン・ベックウィズ氏を中心とする史跡保存の運動である。現在，トパーズ博物館を設立し，建物や収容所に関する資料保存を情熱的に進めている。[3] いずれにせよ，アメリカ人の心の中でもこの「過去」は完全には風化していないようである。

日系人の永年の悲願であった賠償の実現は，当然ながら強制立退き・収容政策に関する研究にも少なからぬ影響を与えている。1970年代以降のこ

写真E　（左より）筆者，ベックウィズ氏，篠田氏
デルタの氏の自宅にて



写真F　博物館に移築保存されている収容所のバラック

写真G　博物館に寄贈・展示されている被収容者の絵

の分野の研究は多かれ少なかれ，この政策に関わった立法府・行政府・軍部の人間や，結果的にこれを支持する形になったアメリカ社会の人種偏見を明かにすることを主眼としてきた。広範なアメリカ社会全体のマイノリティの権利獲得をめざす公民権運動と，その中で日系アメリカ人が繰り広げてきた具体的な賠償要求運動を背景にしたものであった。その研究の流れが，賠償の実現により行き場を見失っているように見えるのである。

一方で，問題はまだまだ終わってはいないのだと主張する声がある。本稿で紹介するサンドラ・テイラー教授（ユタ州立大学）の近著『砂漠の宝石：トパーズの日系人強制収容』(1943) は，その序章で現段階を，(1)日系社会において，古い世代には決して忘れられない体験であり，収容所を知らない若い世代にとっても，「マイノリティとして生きていくのに重要な意味をもつ」こと，(2)一般のアメリカ社会においても，「賠償運動によって興味は少し盛り上がったが，必ずしも情報がきちんと伝えられているわけではない」と捉えている。評判になったハリウッド映画『愛と悲しみの旅

路（Come See the Paradise)』についても，「啓蒙的でなく，日系人に関するステレオタイプと誤った情報に基づく曖昧なイメージを永続化した」と断じている。更に，(3)湾岸戦争の時に，アラブ系の人々に同様な事態が起こり得たという事実を挙げ，この問題が形をかえて再び起こる可能性を指摘している。

前置きが長くなったが，本稿では，この書物の内容の分析と，彼女がこの曲がり角とも言うべき研究史の流れの中で示した今後の研究の方向性と課題に関して，若干の私論を展開したい。比較的地味な叙述であるが，リドレス後のこの分野のフロンティア的な著作の１つであるように思われるからである。

本書の特徴と構成

筆者について

テイラー氏はユタ州立大学の歴史学の教授であり，アジア研究学部長である。本書は長年の日系アメリカ人史に関する数々の論考をまとめたものである。トパーズを訪れる数日前，短い時間ではあったが，ソルトレークシティの彼女のオフィスでお会いすることができた。著書の中に見られる人種差別的な収容政策や，悪意はなくともそれを支持する結果となった一般のアメリカ社会の人種偏見に対する毅然とした態度と，一方で個人レベルにまで及ぶ日系人に対する「優しいまなざし」のようなものが感じられる人物であった。本書の中でも，五十名ほどの日系人に対する面接調査の結果が織り込まれており，生活者の視点から，戦前，戦中，戦後のコミュニティの状況が生き生きと描き出されている。

テイラー教授は政治的には日系市民協会（Japanese American Citizens League. 以後JACL）に近い立場の研究者だと言われている。JACLは，立退きの時点から一貫して，アメリカ政府の政策に協力することによって忠

誠を証明しようとする立場に立ってきた。それは，この書物からも感じられるところである。序章において，彼女は「誰もこの歴史の一片に関してはニュートラルでいられない」として，次のように述べている。

> 強制立退きを悪だとすることは，収容された人々が全て同じように犠牲にされたということでもなければ，彼らを閉じ込めた人々が必ずしも全て，彼らを傷つけようとした悪者だと云うことにもならない。多くの日系アメリカ人が，肉体的にも精神的にも，自らが犠牲者になることを許さなかった。彼らの中には，たちまち元気を取り戻し，決然としていた者もあり，戦後の彼らの成功は，彼らに対する強制収容政策の愚かしさを立証するものとなっている（xv）。

近年，当時の政策や関係者に対する声高な批判が目立っていただけに，問題全体としては，バランスのとれた捉え方のように思われる。だが，一方で，恐らくはこの文章の後半に述べられている人々の中に含まれているのであろうJACLの人々に対する，日系社会における批判的な意見に，彼女はどのように答えるのであろうか。「ニュートラルでいられない」と云われて期待しただけに，正面からの議論が避けているように思われて，物足りなさが残った。

この強制立退き・収容政策の実施において，ユタ州，特にソルトレークシティは，偶然にではあったが，特別の意味をもっていた。日系アメリカ人の運命を決める重要な会議が2つ開催されたのである。元々この政策は，文字どおり，日系人の西海岸からの排除だけを目的としていた。当時西海岸には全米の日系人の97％が集中しており，長い排日の歴史をもっていた西海岸から彼らを，内陸部に移動させる（できうれば日本に「送還」する）ための政策であった。これを出鼻でくじいたのが，42年4月7日，ソルトレークシティで開かれた州知事会議であった。西部十州の代表者と，ミルトン・アイゼンハワー戦時転住局（War Relocation Authority：以後WRA）局長らが出席し，再定住の試案を示したが，被立退き者の受け入れは大筋において拒否された。立退きは既に進行中であった。この会議により，当初の目的とは異なり，収容が長期化することが決定されたの

である。いま一つ重要な会議は，同年11月17日に始まったJACLの特別緊急全米会議であった。この会議で，マイク・マサオカが日系人が軍務につく権利を要求することを提案し，開戦時に奪われていた選抜徴兵義務の復活を求める動議が通過したのである。これは，間もなく，忠誠登録，二世部隊の編成に結びつくことになり，JACLを支持する人々と，これに反対する人々の対立を深めることとなった。[4] テイラー氏はソルトレークシティにあるユタ州立大学に籍を置き，長年日系人への面接を含む丹念なフィールドワークを重ねてきたわけであるが，面談の折，この土地が結果的にもつことになった「特別な意味」について思い入れを込めて言及されたのが印象的であった。

研究史の分岐点

日系人の歴史に関する研究史の現状をもう少し見ておこう。日系アメリカ人の歴史の中でも，強制収容期に関するものは，最も蓄積の厚い分野であるが，後述するように未だ様々な形で分断されており，統合にむけて課題が多く残されているように思われる。これは，研究史そのものの未成熟さを示すというよりも，研究をめぐる社会的環境，資料の出方など特殊な条件が影響を与えているものと思われる。

そもそも，この時期に関する研究は，第二次大戦中にWRAによって収容所内のコミュニティ研究を認められたカリフォルニア州立大学の社会学者ドロシー・T・スウェイン博士を中心とする「日系アメリカ人の強制収容と再定住に関する共同研究」（JAERS: Japanese American Evacuation and Resettlement Study）にその源を発している。70年代後半までは，これらの研究者や彼らが収集した資料を二次的に用いる研究が主流であった。政策自体への批判はあっても，同じ批判はWRAには向けられていない。[5] 当然のごとくにWRAの政策や，WRAに協力的だった日系市民協会寄りの論調が前面に押し出されているという問題点は感じていても，当時依拠

することのできる唯一の資料であった。そこでは，不幸な境遇のなかではあるが，精いっぱい人道的な政策を採ろうとしたWRAと，忠誠を示すために耐えた日系人とのある種の信頼関係のイメージが作り上げられた。戦争中の当時としては例外的に莫大な費用をかけたこの研究であったが，その成果はそれほど多く公刊されなかった。[6] 戦時中のこととて，公開できない情報が多かったためであるとされている。このような資料が表面に出てくるようになったのは，80年代も後半，情報公開を認める動きの中でのことであった。1982年，戦時民間人強制立退き・強制収容調査委員会（Commission on Wartime Relocation and Internment of Civilians）が報告書を公刊し，収集されたほとんどの資料が公開された。現在未公開なのは司法省関係の資料くらいではないかと思われるが，この資料が隠している部分はかなり大きい。ジグソーパズルの駒は，まだ出揃ってはいないのである。

研究史の流れが変わって来たのは，先述した通り，70年代も後半のことである。公民権運動の盛り上がりと，それを背景にした日系人の権利意識の目覚め，賠償要求運動という具体的な動きの進展の中で，WRAやJACLに対する積極的な批判も多く見られるようになった。[7] JACLは，開戦以来一貫して，日系アメリカ人の社会では最も雄弁な団体であった。アメリカ社会から向けられた人種偏見に対する怒りは共有しながらも，これに反発するのではなく，これを押し戻す方向の政策を採り続けてきた。JACLは戦後も雄弁であった。賠償要求運動においても常に先頭に立ってきた。批判の声も多く聞かれたが，賠償を実現するという目的は，JACLシンパ以外の多くの人にも共有されてきた。その中で，全く異なる歴史解釈があっても，強すぎる論争はさけてきたのではないかというのが筆者の印象である。お互いに目をつぶりあう部分があったが故に，批判の中から生まれるべきだったものが生まれなかったのではないか，と思われるのである。ようやく，この問題を政治的問題としてでなく，歴史的に位置づけ

ることができるようになったこの時期に出版された本書が，この点を避けているのは，やはり残念なことであった。

構成

ここで本書の構成と内容の概略を押さえておこう。筆者も主張する通り，本書の第一の功績は，強制収容政策を，戦前から戦後に至るまで一貫して日系「コミュニティ」（「自らのエスニシティの故に母社会から隔絶されている人々をまとめている組織や制度（xii）」と定義づけられている）の変遷史の中で捉えている点である。そこでは，サンフランシスコという，比較的古く，地理的にもコンパクトにまとまった日系コミュニティを採り上げ，戦前の形成の過程から，仮収容所，WRA収容所における新たなコミュニティの再編と解体，更に戦後，かつてのコミュニティの一部が再再編されるまでが継続性をもって論じられている。具体的に，追ってみよう。

まず，第1章では，S・フランク・ミヤモトらの議論を援用しながら，戦前の日系人コミュニティが，日本における出身地，言語などを同じくし，様々な組織（日本人会，県人会，日系市民協会，など）や職業上のネットワーク，宗教，教育機関などで結びついている集団であり，「1924年に移民が停止された後，その成長が基本的に内的なものにならざるを得なかったが故に，お互いのことを知り尽くしており」，かつ「周囲から嫌われているマイノリティであり，人種主義や差別の対象であるという社会的な地位が彼らを一層近づけた」として規定されている。

「真珠湾から強制立ち退きへ」と題する第2章では，経済的にはまずまずの発展を遂げていた日系コミュニティが，実際には外部の差別によって孤立させられており，一世のコミュニティ意識を強化していたこと(42頁)，二世の中にJACLなどを結成する者が表れるなどの動きは見られるが，この時点ではまだ二世も「同化を望んでいなかった」，としている。「日系以

外との結婚がほとんど見られないことにも表れているように，戦前の二世は決して日系コミュニティを見捨てていなかった（43頁）」のである。このような状況下に，思いがけない真珠湾攻撃の報が届いたわけである。

仮収容所となった競馬場での生活（第3章）は，収容政策を通じて最も苦しい経験として語られることが多い。WRA収容所の準備が整うまでの一時的なものとして宛われた。不完全で，まるで刑務所のような施設に，短期ではあるが，さりとていつまでという約束もないまま留め置かれた。自治制度はうたわれていても，完全な自治など望むべくもなかった。にわかに差し向けられた，白人の行政官との関係も好ましかろうはずもなく，コミュニティを作り上げることはできなかった（88頁）。

1942年9月のタンフォーラン競馬場からトパーズへの移動（第5章）は，「戦前のサンフランシスコ近辺の日系コミュニティの永久的な変化（88頁）」の契機として捉えられる。新たな収容所は，設備の面ではより恒久的なものであったが，一部の人間にとってはより短期的なものであった。到達するや否や，再定住計画が実施にうつされたためである。事情の許す者は早々とシカゴやソルトレークシティなどの中西部や山間部諸州，東海岸へと出所していった。この時点で居残った人々はそれぞれに事情を抱えている人ばかりでもあったが，出所していった人々の暮らしぶりが楽ではないということもあって，1944年初頭には再定住への興味は薄れていった。

他の収容所に比較して比較的穏やかな収容所だったトパーズに問題が生じたのは，自治制度の導入がきっかけだった。この自治制度がHarry Kitanoの言う「参加型の民主制度」ではなく，Roger Danielsの言う「刑務所の中の信託統治」的な，便宜的な制度として捉えられている。この時点でトパーズのコミュニティに特徴的なのは，自治制度やこれに協力的で，それ故他の収容所では周囲から怪しまれていたJACLの人々の存在が，あまり問題に成らなかった点であったと指摘されている。むしろここで問題になったのは，活動的な指導者層が早々に収容所を出ていったために，自

治組織内の指導者が育っていかなかったことであった（133頁）。忠誠登録をめぐる論争はここでも大きな問題となっていったがここでは類書に比べて比重が小さい。（第6章）

忠誠登録と不忠誠者の隔離などの大きな変化もあったが，コミュニティの変化は，再定住政策により，ゆっくりと進行していった。出所する者にも不安はあったが，残るものにも影響は大きかった。若者は早く出所していった。一世のリーダーたちはWRAの行政官に協力するにはこだわりがあった。収容所内で必要な労働力を確保することも難しくなっていった。テイラー教授のWRA職員に対するインタビューは，再定住政策全般に対する行政側の姿勢と，被収容者の感情のすれ違いを鮮やかに浮かび上がらせる（第7章）。そして，西海岸への帰還の許可により，それまでぐずぐず収容所に残っていた人々も出所を余儀なくされるのである（第8章）。

強制立退き・収容政策に関わった白人の側にはこの政策に対する疑いはわかなかった。この政策を決定したのは彼らではなかった。戦争中は誰でも何かを辛抱するのは当然のことだと考えられた。この政策の影響で，アメリカを嫌う日系人が出てきたら，彼らはただ日系人の中に不忠誠な人間がいるのだと思うだけだった。戦後の日系コミュニティの状況をテイラー教授は次のように総括している。

> 彼らは，後の文献で評価され，今は論争の的になっている，誇るべき「サクセス・マイノリティ」になりたかったわけではなく，目立たず，人種主義や人種差別を避けて，善き市民となりたかった。そのことで，彼らが常にどれほどアメリカに忠誠であったかということを示そうとしてきたのだ。心の屋根裏部屋に押し込められた古い着物のように，タンフォーランやトパーズの思い出は押し込められた。こうして，三世の多くは，両親や祖父母の世代が何を堪えてきたのかということを，気づかずに育ってきたのだ（第9章）。

一世を中心に，人種差別で一般のアメリカ社会から孤立せざるを得なかった日系社会が立退きにより崩壊した。タンフォーラン仮収容所ではそれが仮の収容所であったが故に，トパーズでは移動と同時に開始された再定住政策の故に，完全な形のコミュニティの再生ができなかった。他の収

容所で一般的であった，所内の自治組織の中での一世と二世の主導権争いによる対立も，二世が積極的に再定住に応じていった為に，自然な形で回避され，他の収容所ほどの混乱は生まれなかった。遂に，コミュニティの形成ははばまれる結果となった。WRA職員の中には，勿論，日系人と対立姿勢をとる者もあったが，同時に同情を寄せた者もあった。が，彼らにとって大切であったのは，あくまでも職務の遂行であり，日系人の苦しみを真に理解するには至らなかった。「戦争中のことだから仕方がない」というのが，白人側ばかりでなく，日系人にとっても逃げ場になった。自分たちが受けた扱いの不当性を訴えるのではなく，沈黙をもって堪えることで「モデル・マイノリティ」の地位を獲得していったのだと捉えている。

本書に見られるのは，必ずしも新しい事実の発見ではない。寧ろ「使いふるされた資料（familiar materials）」[8]がほとんどであるのだが，それが「コミュニティ」というキーワードを得て，新たな視点からダイナミックに読みかえられ，組み替えられている。

研究史上の貢献

本書の研究史上での貢献を考えるにあたって，(1)日系アメリカ人の大戦中の経験を，戦前から戦後に至るまでの継続性をもって捉えていること，(2)サンフランシスコからトパーズへ移動した，特定のグループにしぼって考察していること，(3)日系アメリカ人に対する聞き取り面接調査の成果を積極的に活用していること，(4)WRA職員や周辺の住民などにも目配りしている，という4点を中心に検討していきたい。

まず，戦前から戦後に至る時間的な継続性についてみてみよう。

現状において日系アメリカ人史全体をみるならば，テーマとしては面白い素材らしく日米関係史，アメリカ史，マイノリティ研究などでしばしば採り上げられているが，対象とされる時期，視点，方法論など様々な面において細分化され分断されている。歴史学，社会学，文化人類学，経済学

など様々な領域の研究者が，実に様々な視点から取り組んでおり，数多くのモノグラフが積まれている。対象とされる時期については，(1)1924年の移民法前後まで，(2)1930年代，(3)第二次大戦中，(4)再定住期，(5)現在，に大別される。(2)の時期に関しては，研究がかなり遅れているが，[9] これは，賠償運動への影響に対する配慮も大きく働いているように思われる。(4)の再定住期に関しては，最近，研究が進みつつある。量的に計ることは難しいが，(3)に関わる部分が最もおおく，(1)がこれに次ぐのではないかというのが筆者の印象である。確かに立退きの政策決定に大きな影響を及ぼした西海岸の排日的世論の形成に関しての研究は見られるが，その中の日系社会の状況は見えてこない。本書の第一の功績は，「コミュニティ」というキーワードをもってくることで，この断続状況にある研究に時間的な継続性を与えたことであろう。

「サンフランシスコ」，「タンフォーラン」，「トパーズ」という3つの定点を定めて観察を行ったことも意義のある試みであった。移民が早く入植し，長い歴史をもっていたシアトルやサンフランシスコと，比較的後から入っていったロサンゼルスでは日系コミュニティの成熟の仕方も異なっていたはずである。排日機運の強かった土地と，それほどではなかったところ，都市と農村でも日系人の強制収容の捉え方も異なっていたものと考えられる。「仮」の収容所であるタンフォーランでの生活に他と等分の扱いをしていることも新鮮であった。「仮」の宿ではあっても，確かにそこには，収容政策の矛盾や問題点，被収容者のその後の進路を決定させる物理的・精神的な全ての問題が映し出されている。一昨年，収容所の跡地をめぐる旅をしたことは文頭に述べた。それぞれの収容所の事情をもう一度見直してみることの必要を感じさせてくれたことがこの旅の一番の収穫であった。[10] 少なくとも夏場は緑も水も豊かなツールレーキやミニドカと，暑さも厳しく乾燥しきったトパーズ，ポストン，ヒラリバー，湿地の中に置かれたジェローム。自然環境は被収容者に，精神的にも肉体的にも影響を

与えたはずである。最近，本書に限らず，特定の収容所に関するモノグラフが多く表されているのは，このような意識からだろうか。「これまで全ての収容所を同じレベルで捉えていた」ということは，実は見ている収容所と見ていなかった収容所があった，ということでもあった。研究者の注目は主としてトパーズのように比較的穏やかだった収容所にではなく，「不忠誠者」を隔離したツールレーキ，マンザナ，ポストンなどのように騒動のあった収容所，ハートマンウンテンのように大勢の徴兵忌避者を出した収容所に向けられてきた。大きな騒動のなかった普通の収容所の問題性を気づかせてくれたのも本書であった。

普通の収容に向けられた目は，そのまま普通の日系人個人にも向けられている。日系人に対する面接調査の結果が豊富に織り込まれることで日系人の生活全般が活々と浮び上がっている。コミュニティのリーダーシップを握っていた人々ばかりでなく，普通の生活者が普通の言葉で自らを語る。大統領，WRA局長，陸軍や司法省，等の政策立案者のレベル，WRAの政策実行者のレベル，WRAと被収容者との相互関係，などなど何層にも重なるこれまでの研究成果に，生の人間の姿と，その人間が造り上げるコミュニティの姿を生き生きと浮かび上がらせたことは，本書の最大の功績であったろう。若干の事実誤認（例えば，移民多出県の名前など）や，日本文化に対するステレオタイプ化された，あるいは多少の誇張，的はずれだと思われる捉え方（移民社会における女性の地位，キリスト教教会の役割など）などが見られたり，日系人の証言に関する解釈にあまりにナイーブ過ぎるのではないかと思われるところはあるが（日本人の謙譲など，そのまま受け取れば逆の意味にもなりかねない。），そのことだけで，本書の意義が減じるわけではない。

日系人ばかりでなく，WRA職員や，周辺のコミュニティの人々への目配りも，これまで忘れられていた視点であろう。WRAの職員のパーソナリティや労働環境，育ってきた状況（日系人を知っていたか否か，など）

は，収容所内の人間関係にも大きな影響を与えたはずである。収容所と周囲のコミュニティの関係はどうだろう。氏は，出所した日系人の受け入れについても目配りを忘れない。これに加えるとするならば，収容所に残った人々と，周囲の関係が残っている。収容所は外部と全く隔絶された社会として捉えられがちであるが，収容所内で開かれた催し物に招かれた経験を語ってくれた人々がいた。鉄条網の内と外でも少しの交流はあったようだ。[11] 逆に交流がなかったことも１つの「関係」と考えられるかも知れない。かつて，収容所内で日系人が厚遇されすぎている，という不満が一般のアメリカ社会にあったと聞く。ある女性が気の毒そうに目を伏せながら「でもね，収容所の中には電気も，水道も，電話もあったの。周りにはまだなかったのにね。それを見てうらやましいな，と思ったのも当然なのですよ」と語ってくれたことがある。ハートマウンテンの病院は州内で２番目の規模を誇っていたという。戦前に営々と気づき上げたものをすべて失なった日系人の失望感を脇におくならば，事情を知らぬ地元の人々が羨むのも無理からぬ話であろう。

まとめにかえて

今も目に鮮やかなトパーズ収容所跡地の風景を重ね合わせながら，サンドラ・テイラー教授の近著『砂漠の宝石』を読んできた。戦争，人種差別，立退き，強制収容，仮収容所にあてられた馬小屋の臭い，砂漠の収容所，鉄条網。その中で，築き上げられ，壊され，新たに再生した日系コミュニティとこれを抱えるアメリカ社会。長い歴史を見通した，しかも，しっかりと大地に足を踏まえた観察と，押さえた途述の中に，テイラー氏の主張する通り50年の歳月を経てなお，消えない傷が見えてくる。リドレス後の課題は，それぞれの研究者の政治的立場も含めて相対化しつつ，研究の統合を目指すことにあるように思われる。

注 1) 1994年7月末から8月，約2週間をかけて，ツーラレーキ（カリフォルニア），ミニドカ（アイダホ），トパーズ，モアブ（ユタ），ハートマウンテン（ワイオミング），アマチ（コロラド），ヒラリバー，ポストン（アリゾナ），ローワー，ジェローム（アーカンソー）のWRA収容所と，サンタフェ（ニューメキシコ）の司法省の収容所跡を訪ねた。移民研究会の会員である篠田左多江氏（東京家政大学）と中畑義明氏（市川高校）に同行させていただいた。その間に様々な知見を得ることができた。紙面を借りて謝意を表したい。

2) これらの建物は，戦後復員してきた兵隊などのために売却されたものである。また前年に一度この地を訪れ，この時も案内してくださった中畑氏の話では，前年とは比べものにならないほど周辺の農地化が進んでいるという。実際，農地は，この収容所跡地のすぐ近くにまで迫っていた。

3) ベックウイズ氏は英語の教師として1年間日本に滞在したこともある。自分の住んでいる地域でかつて，顕著な人種差別が行われた。しかもそのことを，周辺に住む人々がほとんど教えられていない。二度と同様な差別が行われないためにも，周辺の住民に対する啓蒙が必要だ，と語ってくれた。目下，ベックウィズ氏の運動は現地でも孤軍奮闘の感がある。我々のような人間がわざわざ日本から訪れるということで，町の人々がこれが大事なことだと気づいてくれるかも知れない，と言う。恐らくは「戦争を知らない世代」であろう一人のアメリカ人が，日系人の問題を自分の問題として捉えようとしていることが心強かった。

4) この会議の模様については，ビル・ホソカワ著・猿谷要監修『120%の忠誠：日系二世・この勇気ある人びとの記録』（有斐閣，昭和59年），213－229等に詳しい。

5) Audrie Girdner and Anne Loftis, *The Great Betrayal: The Evacuation of the Japanese-Americans During World War II* (1969)., Roger Daniels, *The Polities of Prejudice: The Anti-Japanese Movement in California and the Struggle for Japanese Exclusion (1966); Concentration Camps, North America: Japanese in the United States and Canada During World War II* (1971),等。

6) Dorothy Swaine ThomasのThe Spoilage (Richard Nishimotoとの共著)とThe Salvage等がそれである。テイラー氏はJERSの研究への批判に対し，(1)WRAに対しはっきり批判的な立場にたっていること，(2)豊富な資料を与えていることを挙げて，評価している。

7) Richard Drinnon, *Keeper of Concentration Camps* (1987), Michi Weglyn, *Years of Infamy: The Untold Story of America's Concentration Camps* (1976),等。

8) 本書に寄せられたGary Y. Okihiro氏のコメントより（背表紙）。

9) 日時は定かではないが，ユージ・イチオカ氏より「公開しない」ことを条件に，二世のナショナリズムに関する論文のコピーをいただいたのを思い出す。

10) 森武麿氏（駒沢大学）も最近，いくつかの収容所跡地を訪ねられ，本年1月の移民研究会での講演の時にも，同意味の発言をされて意を強くした。氏は最近，『50年目の証言：アジア・太平洋戦争の傷跡を訪ねて』（集英社，1995年7月）を公刊されている。

11) この点についてはArthur A. Hansenらの口述生活史の集積が貴重な資料を提供してくれる。Arthur A. Hansen. ed. *Japanese American World War II Evacuation Oral History Project* (6 vols), California State University, Fullerton, 1991.